

ニガウリ新品種‘試交1号’の育成経過及び特性

*河原一五郎・八反田憲生・富永 寛・高橋英生（宮崎県総合農業試験場・*宮崎県農業大学校）

Ichigoro KAWAHARA, Norio HATTANDA, Hiroshi TOMINAGA and Hideo TAKAHASHI: Breeding Process and other Characteristics of a New Bitter Gourd Cultivar ‘Shiko No1’

濃緑で長形多収のニガウリ品種を育成する目的で、F₁組合せのための両親系統を育成し、そのF₁組合せの中から、果色、収量、果形、着果習性等の点で、ほぼ目的とする組合せが得られ従来品種に比べ実用性の高いことが認められた。‘試交1号’（仮称）として、その育成経過並びに特性の概要を報告する。

1. 来歴及び育成経過

宮崎県総合農業試験場において育成した、‘宮崎緑’の母系‘佐土原13’をもとに、果色が濃緑で突起が少なく、濃緑色果の沖縄系、小果で淡緑ながら果面の突起が極めて少ない中国系のニガウリを交配、選抜して長形、濃緑色で着果性の極めて良い系統‘7211’と、これに短形ながら果色が極濃緑色の久米島系のニガウリを交配したものの中から、中短形、濃緑色で果面は条状の突起でこぶ状突起が無い‘2221’を選抜した。1987年以後両親系統間のF₁について促成栽培、半促成栽培、早熟栽培で能力検定を実施し、実用性の高いことを認めた。‘試交1号’は採種の効率から前者を母系、後者を父系とした。

2. 特性の概要

茎葉 ‘宮崎緑’に比べて主枝が細く、節間長は短い。葉の大きさはやや小さく、葉色もやや淡い。草勢は‘宮崎緑’より弱い。

雌花着生性 雌花着生は‘宮崎緑’と比べ明らかに多く、親蔓は4節で摘心し、子蔓を伸ばして仕立てた主枝の雌

花節率は70%を示し、側枝の雌花着生も多い。

果実 果形は長円筒形で、収穫適期の果実は、果重150g、果長33cm程度であり、‘宮崎緑’よりやや細い。肩部はやや流れるが、果形は安定しており揃いがよい。果皮色は‘宮崎緑’に比べて極めて濃く濃緑色である。果実表面の条状突起は長くて、滑らかであり、こぶ状突起も丸くて小さく、尖りは全くみられない。このため収穫後、果面に傷が付きにくい。収穫適期の果実の苦みはやや少なく、日持ち性は中程度である。

収量 果数型の品種であり、‘宮崎緑’と比べて収量の増加は果数の増加に由来するものである。一方、果重がやや小さく、果数が多いため中物、下物がやや多い傾向がみられる。

3. 栽培上の注意

草勢がやや弱く、雌花着生数も多いので、多着果による株疲れがやすい。かん水量、施肥量は‘宮崎緑’よりやや多めにし、交配時には不良雌花を整理して草勢の維持に努める。親蔓は4節で摘心し、子蔓を2～3本伸ばして主枝とする。これから出る8節までの側枝は早めに除去する。

以上のように、‘試交1号’は、果皮色が濃緑色で果形が長円筒形で揃いがよく、収穫果数、重量ともに多く、有望な系統と考えられる。

第1表 果実の特性

系統名	果重(g)	果長(cm)	果径(mm)	果皮色	こぶ状突起	条状突起	果形
試交1号	161	33.7	33.9	濃緑	滑,少	長	長円筒形
宮崎緑	198	32.0	34.7	淡緑	大,少	中	円筒形

第2表 a当たり収量(1990.5.～6.収穫)

系統名	総収量		品質別収量			1果重(g)
	本数(本)	重量(Kg)	上物(Kg)	中物(Kg)	下物(Kg)	
試交1号	2,028	324	210	96	18	159
宮崎緑	1,518	309	263	44	2	203